

带状疱疹の治療と予防

带状疱疹とは

带状疱疹は子どもの頃に罹患した水痘（すいとう）、いわゆる水疱瘡（みずぼうそう）のウイルス（VZV=varicella-zoster-virus）が再活性化することで発症する病気です。VZVは水痘が治癒した後、皮膚の知覚神経を伝って、背骨の脊髄後根神経節に潜みます（潜伏感染、日本の成人の9割がその状態と考えられています）。加齢やストレス、過労などが引き金となってウイルスに対する免疫力が低下すると、潜んでいたウイルスが再び活動を始め、神経を伝わって皮膚に到達し、带状疱疹として発症します。

带状疱疹の発症には加齢が関係しているため、50代から带状疱疹の発症率が高く、80歳までに約3人に1人が発症するといわれています。患者さんの7割が50歳以上、3割が50歳未満

で、若い人でも発症することがあります。一度带状疱疹を発症すると、VZVに対する免疫力が上がるため、再発することはまれ（数%）と言われていますが、高齢者や抗がん剤や免疫抑制剤の治療を受けている人では再発することがあるので注意が必要です。

带状疱疹の症状・合併症

多くは、発疹が出現する1週間ほど前から皮膚にピリピリ、チクチクとした痛みが起きます。その後、赤みを伴った水疱（水ぶくれ）が体の左右のどちらかに带状に現れ、徐々に痛みが強くなります。症状の多くは上半身（3割）にみられます。首から上の带状疱疹は、重症の場合、失明や顔面麻痺、難聴を引き起こすことがあります。治療が遅くなったり、免疫力が低下した人の場合は、高熱が出たり全



北九州市立八幡病院
皮膚科主任部長
鶴田 紀子 先生

佐賀大学医学部医学科卒業。医学博士。日本皮膚科学会認定専門医。専門は乾癬。西日本炎症性皮膚疾患研究会理事。乾癬の疫学研究を福岡大学等と共同で行っていらっしゃいます。



北九州市立八幡病院
北九州市八幡東区尾倉 2-6-2
TEL 093-662-6565 (代表)

带状疱疹の予防

身に発疹が拡大することもあります。発疹は1週間程度で痂皮（かさぶた）になり、時に癢痕（きずあと）を残して治癒します。神経痛は1週間がピークで、その後徐々に軽減しますが、带状疱疹後神経痛という後遺症を残すこともあります。

50歳以上の人は带状疱疹の予防接種ができます（自費診療）。予防接種は带状疱疹を完全に防ぐものではありませんが、たとえ発症しても軽症ですみ、带状疱疹後神経痛などの後遺症の予防につながるデータがあります。予防接種には、水痘生ワクチン（1回接種、予防効果51%）と不活化ワクチン（シングリックス）（2回接種、予防効果97%）があります。

最後にお伝えしたいこと

抗ウイルス薬の内服治療と点滴治療があります。発疹が出てから72時間以内には治療を開始することが望ましいと言われていいます。顔面の带状疱疹や全身に発疹が拡大した人では入院して点滴治療を行うことが多いです。痛みについては鎮痛薬などを内服しますが、夜も眠れないほど強い痛みがある人の場合は、ペイン（麻酔）科で神経ブロックなどの治療を行うこともあります。

带状疱疹かなと感じたら、症状が軽くても、早めに医療機関を受診しましょう。また、带状疱疹の予防のために、免疫を低下しないよう体調管理を心がけましょう。50歳以上では、ワクチン接種で発症を予防できます。